

# コミュニケーション変動の記述法

——コード概念を手がかりに——

赤堀 三郎

現代社会の記述法を考えるにあたって、本稿では「コミュニケーション・コードに係る変動」に着目する。ここではまず、ニクラス＝ルーマンの社会システム理論を踏まえてコミュニケーション・コードを二つのサイドをもつ非対称的な区別として捉える。その上で、コミュニケーション変動をコミュニケーション・コードが新たに生まれる「創発」と、コミュニケーション・コードという非対称的な区別に基づいた意味構成が反転する「横断」の二パターンに分類する。これらの枠組は、さまざまな異なる観点が複雑に絡み合う多次元的な社会を分析するにあたって有用である。

## 1. はじめに

### 1. 1. 問題の所在

こんにち、社会は流動的で境界が曖昧で目まぐるしい変動のただなかにあるように見える。すなわち、あるときには昨日まで常識だったことが自明性を失い、またあるときには一昔前には想像すらできなかったことが現実にかかる。そのような場においては、「ものの見方・考え方」の多様性が増しながらも共存しており、ときには互いに共鳴し、ときには軋轢を起こしている。

このような性格をもつこんにちの社会を言い表すにあたって、それまでの社会つまり近代社会 (modern society) と区別するために、しばしばポスト近代社会 (post-modern society) というタームが用いられることもあるが——あるいは、ギデンズの言うハイ・モダニティを引き合いに出してもいいのであろうが——、ここで

はひとまず、日本語として通りのいい「現代社会」というタームを選んでおこう。

現代社会は、多種多様な「ものの見方・考え方」が生まれ、変化し、複雑に絡み合い、せめぎあう場として記述されることが多い。このような、現代社会を近代社会と区別し現代社会と呼びしめる特徴を、ここではさしあたって多次元性 (Polykontextualität) という言葉で呼ぶことにする。多次元的な社会を、何らかの一貫したパースペクティヴに立って記述することは難しい。また、現状では社会学において多次元的な社会を記述するための枠組がきちんと整備されているとも言い難い。だが、社会が多次元的であるからこそ、社会が示すさまざまな動きを的確に記述することが求められてくるのではなかろうか。

このような状況下、本稿で取り組もうとする課題は、一言で言えば「社会変動 (あるいは変動する社会) を記述するための概念整理」である。だがここでは、「〇〇社会から××社会へ」

といった図式を提示するようなことはしない。変動そのものを経験的に記述するのではなく、そのはるか手前の水準において、すなわち、そもそも「何が」「どのように」変わるのが「社会変動」だと言えるのかということについてまず考察を行い、その上で社会変動の帰結を記述するにあたってどのような枠組が必要なのかを提示する<sup>(1)</sup>。

## 1. 2. 理論的立場

続いて、本稿が「どのように課題に取り組むのか」について手短かに述べよう。

社会変動を論じるにあたって、本稿ではニクラス＝ルーマン流の社会システム理論に依拠して話を進める。数ある社会学理論のなかでも特にルーマンの学説に注目する理由は、彼の用いるコミュニケーション概念にある。ルーマンは、社会システムを「コミュニケーション的出来事の接続プロセス」として把握している。ルーマンの学説においては、社会システムを構成するのはコミュニケーションであり、それ以外の何ものでも——人間でも行為でも物体でも——ない。

「社会変動」というタームはさまざまな内容をはらんでいる。だが、ここで扱おうとしているのは「社会の多次元性の問題」である。多次元性とは「意味」にかかわる領域であるが、ここでは多次元性の問題を考えるにあたって、意味構成の担い手として人間でも行為でも物体でもなく「コミュニケーション」を指定し、社会変動を「コミュニケーションの変動」として考えようというわけである。

社会変動をコミュニケーションの変動として考えるにあたってルーマン社会システム理論に依拠することには利点があるいくつかある。

まず、ルーマンが言うコミュニケーションと

いうタームは日常的に使われるコミュニケーションという言葉が指し示しているものとは少々異なるということに注意を促したい。ふつう、コミュニケーションは送り手と受け手の間で何かがダイレクトに伝わるプロセスだと考えられている。一方、ルーマンの言うコミュニケーションは、送り手と受け手の間で何かが交わされるという二極モデルではなく、情報・伝達・理解という三極モデルにおいて定義されている。

ただし、三極モデルとは言っても情報と伝達が送り手側にあたるとされ、理解が受け手側にあたるとされているので、それは従来のコミュニケーション・モデルと全く異なるわけではない。

だが、何かが「伝達」されているということが「理解」されていなければ、どんな「情報」も「理解」され得ない。すなわち、コミュニケーションが「接続」するにあたっては、必ず先行するコミュニケーションが参照されている。言い換えれば、コミュニケーションはコミュニケーションによって生み出されるのであって、それ以外の方法においてコミュニケーションが生み出されることはあり得ない（作動の上で閉じた、自己言及的システム）。要するに、コミュニケーションが三極モデルによって定義される理由は、コミュニケーションの接続プロセスとしての社会システムを作動の上で閉じた、自己言及システムとして位置づけるためなのである。

詳細は紙幅の都合で割愛するが<sup>(2)</sup>、コミュニケーションが三極モデルにおいて定義されている理由（＝社会システムが作動の上で閉じた自己言及システムとして定義されている理由）は、このモデルによって「コミュニケーションにおいて何が情報として伝達され、何が理解されていくかは、コミュニケーションの外部に存在する何かが規定するのではなく、コミュニケ

ーションプロセス内部の構造、すなわちコミュニケーションという出来事が繰り返し接続することによって生じる構造が規定する」ということを示せるところにある。

コミュニケーション的出来事の接続プロセスを社会システムとして捉えるモデルのもう一つの利点は、社会システムの「構造」を確固とした骨格のようなものではなく、コミュニケーションプロセスのなかで保持される流動的なものとして捉えることができるところにある。

まとめると、ルーマン流の社会システム理論においては、社会システムの「構造」<sup>(3)</sup>はコミュニケーションにおける意味構成のあり方（要するに、「ものの見方や考え方」のこと）を規定する何ものかでありつつ、永久不変のものではなく絶えざる再構成にさらされる何ものかとして位置付けられている。以下、この意味での「社会システムの構造」をコミュニケーション・コードと呼ぶことにする。

このコミュニケーション・コード概念を導きの糸とすることによって、いかにして「社会の多次元的な動きを記述するための概念整理」に切り込んでいくことができるだろうか。章を改めて論じてみよう。

## 2. コミュニケーション・コードとは何か

### 2. 1. コードという区別

再度確認しよう。本稿の課題は「社会変動を記述するための概念整理」であり、より詳しく言えば「社会システム理論におけるコミュニケーション・コード概念の整理」である。この課題を立ち上げるにあたって、そもそもコードとはいかなるものことなのかということから話を始めてみよう。

コードという言葉自体はさまざまな分野にお

いて用いられている。例えば、通信工学ないし情報工学の分野では音声や画像などを電気信号に変換することがエンコード、電気信号を音声や画像などに戻すことがデコードである。遺伝子のコードはDNAにおける塩基配列のことであり、生物の形質発現のあり方を決めるはたらきを有している。

だが、いずれにしても、コードというタームは「情報の流れをコントロールする何ものか」として使用されていることは変わらない。社会学ないし文化人類学において用いられているコード概念もこの意味から外れてはいない。

ルーマン社会システム理論におけるコードというタームは、コミュニケーションの接続プロセス（＝社会システム）や意識の産出プロセス（＝心的システム）における「意味構成の基盤」のことである<sup>(4)</sup>。だが、ルーマンのコード概念は、コードが区別（差異）として定義されているという点で従来の社会学・文化人類学で言うコードと多少異なる。以下、ルーマンの言う「区別としてのコード概念」について手短かに説明しよう。

### 2. 2. 観察するシステム

ルーマンは、システムの行う認知活動のことを観察と呼ぶ。ここで言う観察とは、「区別をもとにした指し示しからなる作動」として定義される概念であり、ふだん使われる観察という言葉と同じわけではない。

ルーマンの言う「区別に基づく指し示しからなる作動」としての観察概念は、スペンサーブラウンの形式論理学にヒントを得たとされる。スペンサーブラウンいわく、何もない空間に区別を引くことによって、区別で分けられた空間のうち、どちらか一方を指し示すことがはじめて可能になる（Spencer-Brown [1969=1987]）。逆

に言えば、何か指し示されるとき、そこには必ず区別が引かれている。このような考えが、「区別」と「指し示し」の二つから成り立つ作動を「観察」として定義する基礎となっている。

加えて、コミュニケーションが接続し何らかの意味が生み出されるとき、その意味構成の背後には構成された意味の「否定可能性」が潜在化されているとルーマンは考える。すなわち、支払うことは支払わない可能性があるからこそ意味をもち、何か「真理だ」という発言はそれが非真理(=偽)になる可能性があるからこそ意味をもち、「愛している」という発言はその人が愛していない可能性があるからこそ意味をもち、といった発想である。これに「観察=区別にに基づく指し示し」をあてはめて言えば、「支払う/支払わない」「真理/非真理」「愛している/愛していない」といった「区別」に基づいて、「支払う」「真理」「愛している」というサイドの方が「指し示されている」ということになる。この意味で、コミュニケーションの接続過程(=社会システム)も観察を行っていると言える。ここにおいて、社会システムを「観察するシステム」として位置づけることが可能になる。

観察とは「区別にに基づく指し示しからなる作動」のことなのだから、どのような区別が引かれるかによって観察のあり方は変わってくるということになる。つまり、社会システムが行う観察の基盤としての区別は、コミュニケーション・プロセスにおいて情報処理の基盤となっているもの、すなわちコミュニケーション・コードのことなのである。

以上のような理由から、ルーマン社会システム理論におけるコミュニケーション・コードは二つのサイド(すなわち、指し示されているサイドと指し示されていないサイドの二つ)をも

つ区別(差異)だとされているのである。

「区別としてのコミュニケーション・コード概念」がいかなるものであるかを踏まえた上で、次に、このコミュニケーション・コード概念が社会の多次元性の問題に対していかなる意味を持つかということについて展望していくこととしたい。だが、ルーマン流の社会システム理論は、その独特の言いまわし・思考法・多岐にわたる理論的前提等のせいで、ある程度の予備知識がなくては読み解くことがほとんどできない。そこでここでは、ルーマン社会システム理論に対して予備知識がほとんどない読者でも理解できるよう、「区別としてのコミュニケーション・コード概念」をめぐって目下さまざまな論者から提出されている批判ないし問題点を整理することを通じ、その内実を浮き彫りにすることを図ってみよう。

### 3. 学説整理

#### 3. 1. コミュニケーション・コードの二値性をめぐる議論

ルーマンの「区別としてのコード概念」に対する批判としてよく見られるものの一つに、コミュニケーション・コードは二項対立ではない——コミュニケーションはいつも「イエスカノーカ」あるいは「あれかこれか」で割り切れるわけではない——というものがある。つまり、コミュニケーションによる意味構成においては、黒でも白でもないグレイゾーン、あるいは別様の解釈可能性もあるというわけである<sup>(5)</sup>。

だが、そのような批判はコミュニケーション・コード概念の内容を取り違えているのではなかろうか。たしかにルーマンは、コミュニケーションの非蓋然性(Unwahrscheinlichkeit)<sup>(6)</sup>を蓋然性へと方向づけるコードをプレファレン

ス・コード (Präferenzcode) と呼び、それはイエス／ノーという形をした区別だと言っている (Luhmann [1997:360])。だがここで問題となっていることは、「コミュニケーション過程において実際にイエスやノーと割りきって言われるかどうか」(あるいは、「メッセージがイエス／ノーという形で割りきって理解されるかどうか」といったことではない。あくまで「コミュニケーション接続の蓋然性が高くなるか低くなるか」ということが問題となっているのである。

この辺りの事情を、ルーマンは「コードはアナログな状況をデジタルに変えるというはたらきを有する」といった具合に表現している (Luhmann [1997:360])。ここで言うアナログとはあるメッセージにさまざまな解釈の余地があるという意味であり、デジタルとはメッセージの解釈可能性が限られており、それだけ伝達が首尾よく進む可能性が高いという意味である(7)。

おそらくは誰にとっても——したがってどんな社会学者にとっても——経験上明らかなように、言語によるコミュニケーションにおいてはデジタルと言える局面だけでなく、デジタルと言うよりもむしろアナログと言うべき局面もある。例えば、「支払う／支払わない」「合法／不法」といったコードはプレファレンス・コードであり、グレイゾーンは限りなく少ない。「50%の支払い」というのは支払っているのであり、「99%の合法」というのは非合法である。このように考えると、プレファレンス・コードに基づいて生起するコミュニケーションはデジタル的であると言うことができる。だが、「大人／子ども」「日本人／非日本人」といったコードは、区別ではあるがグレイゾーンがありそうである。つまり、こういったコード (区別) に基づいてなされるコミュニケーションはアナ

ログ的だと思われる (むしろ、「20歳の誕生日を迎えたか否か」「日本国籍の有無」など、どこかで便宜的に区別を引き直せば曖昧さは限りなく少なくなるのではあるが)。

だが、スペンサー・ブラウンの主張を考慮に入れば明らかなように、デジタル (明瞭) にであれアナログ (曖昧) にであれ、何らかの出来事が指し示されて規定可能となる (何ものかとして理解される) ときには必ずどこかに区別は引かれている (別様の言い方をすれば、ある理解の背後には、その理解の仕方以外の理解可能性が潜在化されるのだから、顕在化した理解と潜在化した理解可能性との間に区別が存在する) のであるから、その意味でいかなる意味構成もコード (区別) なしに済ますことはできないのである。「イエス／ノーのどちらでもない」という意味構成もまた、「イエス／ノーのどちらでもない——わけではない」という否定可能性を孕んでいるのだから、区別に基づいた指し示しであることに変わりはない。

以上のような理由から、「コミュニケーションにはイエス／ノーで割りきれないグレイゾーンもある」という理由でコミュニケーション・コードの二値性を否定することは正しくないと言えよう。すなわち、区別としてのコミュニケーション・コード概念は、意味構成のグレイゾーンをも含めて概念化されているのである。

だが、コミュニケーションにおけるコード (区別) の不在はあり得ないということを踏まえた上で、ルーマンの言うようにコード化とはすなわち「アナログな状況をデジタルにすること」(換言すれば、白か黒かはっきりしないコンティンジェントな状況を白か黒かのどちらかに規定可能にすること) なのか、それとも、そうではなくグレイゾーンを生み出すようなアナログな (ある程度、理解の可能性が白とも黒と

も言えないコンティンジェントなままになっている)コード化といったものがあり得るのか、という検討の余地は残されているように思われる。

そこで、次節では引き続き「コミュニケーションのアナログな領域におけるコード化とはいかなるものなのか」ということについて、「コミュニケーション・コードの創発 (emergence)」に関する諸議論を手がかりとして引きつつ考察を進めていこう。

### 3. 2. コミュニケーション・コードの創発をめぐる議論

コミュニケーション・コードの創発 (=新しいコミュニケーション・コードが生まれること)によってもたらされるものは何であろうか。コミュニケーションの基盤にあるコード (区別)が変わると、指し示される対象が変わるのだから、「コミュニケーションにおいて話題になり、理解される可能性がそれまで限りなく低かったことがら話題になり、理解されるようになる」だろう。これは、端的に言えば、ある社会が「それまでとは次元の異なる新しいものの見方」を手にすることを意味する。

このような意味でのコミュニケーション・コードの創発はしばしば、新結合 (neue Kombination) によって生じるもの、言い換えれば「コードの統合」として捉えられている。ほんの一例を挙げると、次のようなものがある：

「コミュニケーションのコードが互いに適合し、互いに融合していった場合、また、AでもBでもない結果が、つまり、新しいものを可能にし、永続させていくような、何か新しい第三の実体が生まれていった場合、どのような現実

と合理性が可能となり、また実際に出現していくのであろうか？」(Beck [1994=1997:63])

ここでベックが語っているのは、コミュニケーション・コードの統合による新しいコードの出現可能性である。

だが、政治システムと経済システムが統合してそれらとは全く別の新しい考え方が生じる、といった弁証法のプロセスが果たして現実に起こり得るのだろうか。ここでは、議論の進行上「コードの統合によってコードが創発するかどうか」を経験的に検討することができないので、あくまで概念の上で詰めてみよう。

ルーマンの学説に沿えば、政治システムのコードと経済システムのコードの統合によって新しいコミュニケーション・コードが生じたとしても、政治のコードや経済のコードは消え去らずに確固として残るのだから、いかにさまざまな事柄が新たに主題化されるようになったとしても、そういう場における「ものの見方・考え方」は政治システム、または経済システムの範囲を出ないことになる (システムに特化した普遍主義 Systemspezifischer Universalismus)。要するに、ベックが言っているような「政治でも経済でもない、エコロジーにかかわる新しい考え方」が都合よく生じるといったことは、政治と経済の融合という出来事だけでは期待できそうにないのである。

では、コミュニケーション・コードの創発が生じる条件として、コードの統合以外にいかなるものを挙げることができるのだろうか。

ルーマンの学説を参照する限りでは、コミュニケーション・コードの創発は変異・選択・再安定化という三つの契機を経て起こるとされている。すなわち、進化 (Evolution) である<sup>(8)</sup>。となれば、コードの創発が起こるための第一条

件は「変異の生起」だということになる。

では、変異はいかにして生起するのか。ここでは、ベックもルーマンもコミュニケーション・コードと遺伝子コードとの類似<sup>(9)</sup>を指摘しているという点に注目してみよう。そもそも遺伝子の突然変異はコード化が「弱い」領域において起こるものである。そうすると、コミュニケーション・コードの変異にも、コード化が「弱い」領域が深く関与していると見るのが適切なのではなからうか。つまり、環境(=コミュニケーション過程外部)の出来事がコミュニケーションされるにあたっては、社会システムに柔軟性が必要だ、というわけである。ここで言う「柔軟性」とは、コミュニケーション過程において何が情報として伝達され、理解されるかという可能性にいくぶんか幅があるということ、要するに、コミュニケーションがアナログだということである。こうしてみると、コミュニケーション・コードの変異に重要な役割を果たしているのは、コミュニケーションのコード化が「弱い」、アナログな領域だということになるだろう。

それでは、コード化が「弱まる」という動きは、いかなるものことなのであろうか。——この問いに答えるためには、もう少し概念を詰める必要がある。そこでここでは、議論の進行の都合上、答えをいったんペンディングする(第4章で述べる)ことにする。

次節では、ルーマンのコード概念に向けられたこれまでとは別の角度からの批判を引き合いに出しつつ、「コードの弱化」を考察するにあたって必要な概念について瞥見しよう。

### 3. 3. コミュニケーション・コードの非対称性をめぐる議論

コードの両側にあたる二値は基本的に非対称

的である、とルーマンは言う。なお、ここで言う非対称性とは、「観察という作動においては、区別の両サイドを同時に指し示すこと(真であってなおかつ偽である、善であってなおかつ悪である、支払いつつ支払わない、等々)はできないので、何らかの意味が構成されるときは必ず、区別のどちらか一方に片寄せた指し示しが行われている」といった意味合いで用いられているタームである(Luhmann [1986a= 1998: 107])。

この「コードの非対称性」というテーゼに噛みついたのが、1997年に出た「ルーマン社会システム理論の終焉」というタイトルの論文(Wagner [1997])である。この論文で主張されていることは「ルーマンは、コード(区別)の片側が選好されるという非対称性を強調しているが、それはスペンサーブラウンの学説に決定的な修正を加えたものである。スペンサーブラウンは、区別を特徴づける際に非対称性を導入していない。また、ルーマンは、コードの非対称性を主張することによって、彼が批判しているfundamentalismの伝統を彼自身踏襲するという矛盾にも陥っている」といったものである(Wagner [1997])<sup>(10)</sup>。

ここでは、ルーマンのスペンサーブラウン解釈は正しくないとの指摘がなされているが、その批判はおそらく正しい。だが、ルーマンにしてみれば自らの考えがスペンサーブラウンをヒントとしつつそれとは異なっているということなど先刻承知の上なのだから<sup>(11)</sup>、ここで検討すべきは「社会システムと、コミュニケーション・コードの非対称性との関係はいかなるものか」だということになるだろう。すなわち問題は、コードの非対称性をシステムの「根拠」として捉え得るのかどうかなのである。

たしかにルーマンはスペンサーブラウンの

「区別から始めよ」という言葉を随所で引いている。このことから、ルーマンが「区別イコール根拠」と考えているように見えるのかもしれない。しかしルーマンは、いかにして社会システムの存立が可能になるかということ、あくまでコミュニケーション接続の非蓋然性が低まること（＝コミュニケーション的出来事が継続的に生起するようになること）として捉えようとしている（＝operationalなアプローチ）のであって、コードの非対称性をシステムの確固たる存立基盤として位置付けている（＝fundamentalなアプローチ）わけではないのである（Luhmann [1987]）。

コミュニケーション・コードの非対称性は社会システムが存在するにあたっての「根拠」ではないと言える理由は次の二つにまとめることができる。

一つ目は、「〈コード化そのもの〉という水準と〈コードのどちらの値が指し示されるか〉という水準は異なる」というものである。コミュニケーション・コードの肯定的な側（positive side）の値そのもの（例えば真理／非真理のコードであれば真理の方、所有／非所有のコードであれば所有の方）は、そのままでは選択の基準にならない（Luhmann [1986b=1992:66]）。選択の基準とされているのは、ルーマンの説に沿って言えばプレファレンス・コードではなくプログラムである<sup>(12)</sup>。プログラムとは、コードのどちら側の値が指し示されるかに関する条件づけ（Konditionierung）のことであり<sup>(13)</sup>、例えば、真理／非真理のコードに基づいて作動する学問システムにとっては「理論」がプログラムであるとされ、支払い／不払い（あるいは所有／非所有）のコードに基づいて作動する経済システムにとっては「価格」等がプログラムであるとされている（Luhmann [1986b=1992]）。

二つ目の理由は次のようなものである。「コミュニケーション・コードは区別である」というテーゼはたしかに「コミュニケーション接続プロセスの蓋然性を保証するものはコミュニケーション・コードという区別の非対称性だけである」ということを示しているが、同時に「区別の反対側にはつねにコミュニケーションの否定可能性が潜在化している」ということも含意している。つまり、コミュニケーションにおける意味構成が非対称的なコード（区別）に「基づいている」とはいつても、コードの非対称性そのものは「根拠」と呼べるような絶対的なものではなく、つねに区別の反対側の値によって規制される可変的なものだ、というわけである。要するに、「コミュニケーション・コードは非対称な区別である」というテーゼはコミュニケーションの無根拠性を物語るものではあっても、コミュニケーションが堅固な基盤の上に成り立っていることを示しはしないのである。

いずれにせよ、コミュニケーション・コードの非対称性自体をシステム存立の「根拠」とみなすのは誤りである。まとめると、次のように言えよう。すなわち、「コミュニケーション・コードの非対称性」とはコミュニケーション接続の非蓋然性を低めるという役割を果たしているが、それ以上でもそれ以下でもないのであって、コードの非対称性自体は不動の根拠でも確固たる同一性でもない、と。

だが、コミュニケーションにおける意味構成の無根拠性といったものはルーマン社会システム理論の前提にすぎない。本章で行った学説整理を踏まえた上で、次章では「コミュニケーション・コードの非対称性」を手がかりに現代社会の多次元性を記述するための概念整理へと歩を進めよう。

#### 4. いかにしてコミュニケーション変動を記述するか～コード概念を手がかりに

##### 4. 1. コミュニケーション・コードの横断可能性と再活性化テーゼ

すでに述べたように、コミュニケーション・コードの変異にはコード化の弱い（アナログな）領域が深く関与していると考えられる。だが、「コード化が弱まる」とはいかなることなのかということに関する考察は留保していた。ここで、先ほど説明したコミュニケーション・コードの非対称性を考慮に入れて表現すると、「コード化が弱まる」とは「区別の両サイドの非対称性が弱くなる」ことだと言えよう。

すなわち、区別の両サイドの非対称性が弱いコードにおいては、変異が起こる可能性が高いということになる。では、区別の両サイドの非対称性が強い、つまりコード化の強い、デジタルなコード（例えばプレファレンス・コード）によるコミュニケーションにおいては、変異は起こりやすいだろうか。デジタルなコミュニケーションとは接続の蓋然性が高い（つまり、コミュニケーションの接続が不首尾に終わる可能性が低い）という意味なのだから、コード化が強く、蓋然性の高いコミュニケーション的出来事の生じる場において変異が生起することはきわめてありそうもないことだと思われる。したがって、コミュニケーション・コードの創発が起こる条件は「コードの非対称性が弱まる」ことにあると言えよう。

だがここで、「コミュニケーション・コードの非対称性が弱まる可能性」を指摘すると、「コミュニケーション・コードの創発」という枠組だけではコミュニケーション変動のあり方を記述するのに十分だとは言えなくなるのでは

ないか。

コミュニケーション・コードの非対称性についてルーマンは「非対称性は横断の可能性が開かれることによって埋め合わせられる。そうでないと、区別が区別ではなくなってしまう」（Luhmann [1986a=1998:107]）と書いているが、この言に耳を傾けてみよう。そうすると、コミュニケーションにおける意味構成のあり方の変容に関して「コードの創発」とは別様のパターンが浮かび上がってくる。すなわち、「コードの横断」である。

ルーマンが使う横断（crossing；Kreuz）というタームは、「区別」によって分けられた空間の片側からその反対側へと「指し示し」が移行することを指す、スペンサーブラウンの学説に由来する用語である。だが、ここでルーマンが言おうとしていることはスペンサーブラウンの主張とは若干異なる。スペンサーブラウンは、区別の横断が起こるとき、先行する指し示しは打ち消されるとしている（「無化の形式」）。だが、ルーマンの言う「コミュニケーション・コードを横断する可能性」とは、これまで言ってきたタームで言えば「コミュニケーションの否定可能性」のことである<sup>(14)</sup>。要するにルーマンは、スペンサーブラウンとは違って、区別の横断によって先行する指し示しが無化されるのではなく、むしろそれによって区別の両面が保持される、つまり区別が再活性化されると考えているのである（Luhmann [1986a=1998:108]）。

この「コードの横断可能性が開かれることによってコードが再活性化する」というテーゼ（以下、「再活性化テーゼ」と呼ぶ）は、現代社会におけるコミュニケーション変動のあり方を考えるにあたって示唆に富んでいる。

再度確認すると、コミュニケーションという出来事が生じるとき、その否定可能性（つまり、

メッセージが理解される際の、その理解の仕方を否定するような理解の可能性)が必ずその背後にある。だが、コミュニケーション的出来事として現実に生起しうるのは、肯定的な側であれ否定的な側であれ、区別のいずれか一方でしかあり得ない。コミュニケーション・コードの非対称性を考慮に入れると、多くの場合、指し示されるのは肯定的な側(positive side)の方である。だが、その背後に隠された否定的なサイド(negative side)への横断可能性がないと「コードが区別として活性化し得ない」というルーマンの指摘をも考慮に入れたら、非対称性が弱く、横断の可能性が高いコードの方がそれだけ区別として保持され得るという仮説を提示することはできる。

この仮説が正しいとすれば、「いったんコミュニケーション・コードの非対称性が弱まると、フィードバックのメカニズムによって、非対称性が弱いコードによるコミュニケーションの方が生起する可能性が高くなる」のではなからうか。

しかしその一方で、既に述べたように、コミュニケーション接続の蓋然性が高いのは非対称性が強いコードである。逆の言い方をすれば、非対称性が弱いコードはコミュニケーション接続の蓋然性が低い(=アナログ的)ということになる。

では、コミュニケーション的出来事が生起する現代社会という場においては、非対称性が強く接続の非蓋然性の低いデジタルなコードと非対称性が弱く接続の非蓋然性の高いアナログなコードのいったいどちらが優勢だと言えるのだろうか——このことについて、考察を進めていこう。

#### 4. 2. コミュニケーション・コードのアナ

#### ログ化

ルーマンによれば、現代社会にあつては区別が区別できないというパラドクスが不可視化されている平等規範というコードによってさまざまなコードの非対称性が弱まり、横断が容易になって、区別をまたいだ反対側の値が主要な値とほとんど同じ意味になるといった事態が生じつつあるという。こういう、平準化とでも言うべき変化のことをルーマンは技術化(Technisierung)と呼んでいる(Luhmann [1988→1997:134])<sup>(15)</sup>。技術化が進行すると、その結果、コードの非対称性が生み出していた「もっともらしさ」(Plausibilität)のあり方——パーガー&ルックマンの言うplausibility structureと同じ意味での——が変容していくことになるというわけだ。

この「技術化」の意味内容をよく使われるゲームで表現すれば、「ボーダーレス化」ということになる。だが本稿では、起こっていることは境界の無化ではなくコード(区別)の保持だと考えているのだから、「ボーダーレス」という言葉を用いると語義に反することになってしまう。

再活性化テーゼを主張することの意義は、俗に「ボーダーレス」と呼ばれている社会現象が、実はその言葉とは逆に「ボーダー」を保持する役割を果たしているということを言える点にある。現代社会で起こりつつあるボーダーレス化の現象は「既存のコードに基づいた横断」ではあっても「それまでとは次元の異なる新しい考え方の創発」ではないのである。

話をわかりやすくするため経験的な例を挙げて説明しよう。非対称的なコミュニケーション・コードとしての「男性/女性」「日本人/非日本人」「大人/子ども」といった区別がそれにあたるだろう。「女性の管理職登用」、「非

日本人の地域社会浸透」、「凶悪な少年犯罪」等々の言説は、社会現象として見ればボーダーレス（コードの無化）をもたらしているかのように見える。だが、それらの現象が言説として流布するにあたっては「男性／女性」「日本人／非日本人」「大人／子ども」が、相変わらず非対称的なコミュニケーション・コードとして用いられ続けているのである（コードの再活性化）。

こういった相矛盾する二つの方向を一言で表すために、多義的で曖昧な「技術化」というタームでも語義矛盾となる「ボーダーレス化」というタームでもなく、コードのアナログ化というタームを導入してみたい。この、ルーマンの学説を踏まえたものではあるがルーマン自身のものではないタームを用いることによって、現代社会の特徴を「コミュニケーション・コードがアナログ化する」という点に求めることができよう。

さらに、コードのアナログ化というタームを用いると、コミュニケーション・コードの非対称性の例としてルーマンが言うような真／偽のコードや支払い／不払いのコードといったプレファレンス・コード（機能システムのコード）の非対称性の他にも、日々のコミュニケーションにおいて「老人よりも老人でない者」「未熟よりも成熟」「弱さよりも強さ」「遅さよりも早さ」「古さよりも新しさ」「貧しさよりも豊かさ」「小ささよりも大きさ」「周縁よりも中心」等々のことがらが「優勢」ないし「価値あるもの」とみなされ、選好されている（されていた）といった意味での非対称性をも含めることができるようになるだろう。すなわち、「コミュニケーション・コードのアナログ化が進むと、コードの横断可能性が増し、その結果、さまざまな（無根拠な）優越性が平準化したり逆転したり

する可能性が高まる」といったプロセスを研究の俎上に載せることが可能になるのかもしれない、というわけである。だが、ここにはそういった経験的事象に関する実証研究を繰り返せるスペースはもはや残されていない。

#### 4. 3. コード間の相互依存

だがここで、コミュニケーション・コードのアナログ化について触れておきたい点がある。それは、「コミュニケーション・コードの非対称性が弱まったために、かえって新しいコミュニケーション・コードの創発に抗するような動きも生じるようになるのではないか」ということである。

この問題に関してルーマンは、「技術化によってコード内在的な非対称性が弱くなると、その結果、他の支えが見出されることになる」という興味深い指摘を行っている（Luhmann [1988→1997]）。要するに、コミュニケーション・コードの非対称性が弱まれば、それだけ異なるコミュニケーション・コード間の相互依存性が強まるというわけである。

ルーマンは、政治にとっての宗教、宗教にとっての政治などを相互依存の例として挙げている（Luhmann [1988→1997:133-134]）。ルーマンが指摘しているのはいわゆる「機能システム」の相互依存についてであるが、このルーマンの説を敷衍すると、異なるコミュニケーション・コード間の相互依存はレトリックの水準において観察することができると言えるのではなからうか。

すなわち、文化的性差（＝男／女というコードの非対称性）が曖昧になれば脳や遺伝子や経済的格差や戸籍制度等に区別の「根拠」が求められたり、援助交際や少年犯罪や生徒の反抗等がコミュニケーションされることによって大人／子

どもの非対称性が曖昧になれば法律や道徳や身体的特徴等に区別の「根拠」が求められたりするといったことも、「コードの非対称性が弱まることによって他のコードがレトリックの資源として参照される」ことの例に含まれるであろう。——だが、紙面も無限ではない以上、やはりここでも経験研究についてはその可能性を指摘するに程度にとどめざるを得ない。

## 5. まとめと展望

### 5. 1. アナログ化と多次元性

ここまでの議論によって、本稿を貫く「現代社会（あるいは変動する社会）を記述するための概念整理」という目標がある程度達成されたとすれば、整理された概念を踏まえて次のような現代社会記述の可能性を指摘できよう。

まず、何らかの原因であるコミュニケーション・コードの非対称性がいったん弱まる（つまり、コードがアナログ化する）と、コミュニケーション接続の蓋然性が低くなる。すると、「コード（区別）の横断」やコミュニケーション・コードの変異が起こる可能性が高くなる。コミュニケーションとは自己言及的に生み出される出来事なのだから、コードのアナログ化はフィードバックのメカニズムによってさらなるコードのアナログ化をもたらす（＝コミュニケーション・コードの非対称性を弱化させる）ことになる。

現代社会においてコミュニケーション・コードのアナログ化が進んでいるという仮説が正しいとすれば、そこにおいては新しいコミュニケーション・コードが次々に生まれては消えていたり、さまざまな文化的な非対称性が平準化したり逆転したりする可能性が高い、ということになる。となれば、現代社会の特徴、すなわ

ち、多種多様な「ものの見方・考え方」が生まれ、コミュニケーションの連鎖によって生み出される「もっともらしさ」の構造がつねに変容し続けるといった「多次元性」を、コミュニケーション・コードのアナログ化と関連づけて捉えることができよう。

また、異なる観点間の強い相互依存が起こったり、その裏側としての観点間のコンフリクトも相当数生じるようになったりといったことも、コミュニケーション・コード内在的な非対称性が弱まった結果として描き出すことができる。

だが、以上のような考察はあくまで概念の上で行ったことである。現代社会を経験的水準においてよくよく検討してみると、「観点が多様化した」と言われつつも旧来の対立軸は確固として存在しておりその内部で力点がシフトしてきている（＝コードの横断）だけなのかもしれないし、あるいはそうではなく対立軸そのものをシフトさせたり無化したり新たに生み出したような動きが生まれている（＝コードの創発）のかもしれない。

しかし、いずれにしても、現代社会の多次元性、すなわち現代社会が示すコミュニケーション変動（という言い方がなじまなければ「文化的変容」というタームを持ち出してもよからう）や、観点間の相互依存ないしコンフリクトといった性質を扱うにあたっては、コミュニケーション・コードという区別の非対称性の弱化（アナログ化）が起こっているのかどうかを検討した上で、「コードの創発」と「コードの横断」の差異を見極めることがある程度の有効性を持つことは間違いなからう。

### 5. 2. 残された課題

最後に、今後の展望について述べよう。ここ

からさらに進んだ課題として興味をひくのは「コミュニケーション・コードの変容とルーマンの言う心的システムとの関連」である。心的システムとは、「意識」の連続的産出過程のことであり、これもまた社会システムと同様に区別（コード）によって自己言及的に構成されるシステムである。このような意味での心的システムは、環境からの攪乱（＝意識プロセスの外部に起因する影響）なしには——特にコミュニケーションなしには——構造化しない。そうすると「心的システムの構造はコミュニケーション・コード変容の影響を受ける」ということになる。コード化が弱い心的システムは同一性を確立できないということだろうし、心的システムのコードにおいて横断がしばしば起こるのは、意識が両極端の間を揺れ動くような人格のことであろう。こういったことを踏まえると、「社会システムのコード変容（コミュニケーション・コードの変容）が心的システムへもたらす影響」が次なるテーマとして立ち現れてくる。要するに、社会変動と「心的水準におけるもの見方・考え方」や「心的なアイデンティティ」との関係を考えようというわけである<sup>(16)</sup>。だが、紙幅も限られているので、ここから先については稿を改めて論じることとしたい。

#### 註

- (1) 社会変動（あるいは変動する社会）を記述する枠組を探求することの目的は、現代社会論の一分野であるフレキシブル・アイデンティティ論へと歩を進めるためである。だが、今回はひとまずアイデンティティ論には触れず、その前提となるコミュニケーション変動論の枠組を固める作業を行う。また、本稿では「現代社会」というタームを用いるにあたって社会システム理論で言う「機能的に分化した社会」を念頭に置いている。社会システム理論におけるキータームとでも言うべき機能的分化という言葉を用いない理由は、モダンとポストモダンの差異を「機能的に分化した社会」というタームのみで言い表すことが難しいことと、タームの説明に紙幅を割きすぎることによって論文が冗長にならないようにするためである。なお、筆者は「社会の機能的分化」についての説明および考察をすでに別のところで行っている（赤堀 [1998b]ほか）。
- (2) コミュニケーションの三極モデルに関する筆者による詳論については、赤堀 [1998a]あるいは赤堀 [1999]を参照されたい。なお、ルーマン自身による説明については、Luhmann [1984=1993:第4章]を参照のこと。
- (3) 「構造」概念のルーマンによる説明については、Luhmann [1984=1995:第8章]を参照のこと。
- (4) だが、ルーマンの言うコード概念は、従来の社会学や文化人類学で言うそれよりもむしろ、遺伝子のそれに近い。詳細は後述する。
- (5) 「コミュニケーションにはイエス／ノーでは割りきれない側面もある」という主張の典型例としては、清水 [1997:198]がある。
- (6) Unwahrscheinlichkeitとは、非蓋然性と訳しておいたが、要するに「ありそうもなさ」という意味の言葉である。ルーマンは、コミュニケーションという出来事は本来「ありそうもないもの」だと考えており、その「ありそうもないコミュニケーション」という出来事が実際に生起しているという事実の間にはいかなる条件が介在しているのかを明らかにするという方法を取っているため、非蓋然性を蓋然性へと結びつけるという考え方が重要になってくるのである。
- (7) このアナログ／デジタルという言葉づかいは、ベイトソン (Bateson [1972=1990]) やワツラウィック (Watzlawick et.als [1968=1998]) の言うアナロ

グ・コミュニケーションとデジタル・コミュニケーションの区別に由来する。アナログ・コミュニケーションの例として、ペイトソンは動物のそれも含めた非言語コミュニケーションを挙げ、ワツラウィックは非言語コミュニケーションに加えて言語が発せられるコンテキスト、例えば表情や身振りなどに注目する。他方、言語によるコミュニケーションはデジタル・コミュニケーションであるとされている。だが、アナログ／デジタルというタームでルーマンが言おうとしていることは、言語によるコミュニケーションがデジタルで非言語的コミュニケーションがアナログだとする区分とは異なっている（詳細は後述）。

- (8) なお、ここで用いたEvolutionという言葉は現代の進化論で言う「進化」と同様、いわば価値中立的なタームであって、進歩・発展といったプラスの意味は全くない。
- (9) コミュニケーション・コードと遺伝子コードの類似について述べた箇所については、Luhmann [1975=1986:50]、Beck [1994=1997:63]、Luhmann [1987:13]などを参照されたし。
- (10) ここで引用したワグナーのルーマン批判は、ルーマン批判のレパトリーの中では特異な位置を占めている。ルーマンへの批判はむしろ、ルーマンの言うバイナリ・コードが「法」「正義」「真理」といった価値＝値に何らプライオリティを与えていないという点に向けられることが多い。
- (11) ルーマン自身が自らの主張とスペンサーブラウンの主張との差異を述べた箇所については、Luhmann [1986a=1998]を見よ。
- (12) また、コードにおける二値以外の値、すなわち

「第三の値」がシステムに参入可能になるメカニズムもプログラム概念によって説明されている。

- (13) この「条件付けとしてのプログラム概念」は、社会学的にはどうであれ、システム理論的にどのような位置を占める概念なのかが明らかではないように筆者には思われる。プログラムを「根拠」と捉えることはあるいは可能かもしれないが、いずれにせよ、コードの非対称性に批判を向けるのは誤りである。
- (14) つまりルーマンは「コードあるところ反対側が指し示される可能性が必ずある」と言っているのだから、この意味でもコードの非対称性は「根拠」たりえないのである。
- (15) 1970年代においてルーマンが展開した権力論においても技術化 (Technisierung) というタームは用いられている (Luhmann [1975=1986:120-121])。だが、これはコンティンジェントな状況においてテクニカルに意思決定を進めるようになるといった意味合いの用語であって、ここで言う技術化とは意味内容が異なると考えたい。また、「技術化」とは「技術の発展によって情報が伝わる際の困難さが軽減されること」だという説明も見られる (Esposito [1997])。
- (16) 社会的なものとの心的なものとの相互関係を考えるというテーマへの手短なイントロダクションとしては、赤堀 [1997]、あるいは赤堀 [1999]を参照していただきたい。

\*本稿は、第71回日本社会学会大会の理論部会1で配布した報告原稿（1998年11月／於・関西学院大学）に加筆・修正を施したものである。

## 文献

- 赤堀三郎 1997 「構造的カップリングとセカンド・オーダーの観察」『ソシオロギス』第21号, pp. 132-148.  
\_\_\_\_\_ 1998a 「社会システムの二重の閉鎖性」『年報社会学論集』第11号, pp. 225-234.

- \_\_\_\_\_ 1998b 「社会システムの分化と統合」『ソシオロギス』第22号, pp.1-15.
- \_\_\_\_\_ 1999 「社会変動のコード論的モデル」庄司興吉(編)『世界社会と社会運動』梓出版社, pp.125-142.
- Bateson, Gregory. 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper & Row. =1990, 佐藤良明訳『精神の生態学』思索社.
- Beck, Ulrich / Giddens, Anthony / Lash, Scott. 1994 *Reflexive Modernization*, Polity Press. =1997, 松尾精文他訳『再帰的近代化』而立書房.
- Esposito, Elena. 1997 'Code', in Baraldi, C./ Corsi, G./ Esposito, E. (eds.), *GLU- Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Suhrkamp, S.33-37.
- Luhmann, Niklas. 1975, *Macht*, Ferdinand Enke Verlag. =1986, 長岡克行訳, 『権力』, 勁草書房.
- \_\_\_\_\_ 1984 *Soziale Systeme*, Suhrkamp. =1993(上)・1995(下), 佐藤勉監訳, 『社会システム理論』, 恒星社厚生閣.
- \_\_\_\_\_ 1986a 'Die Lebenswelt- nach Rücksprache mit Phänomenologen', *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*, LXXII, S.176-194. =1998, 青山治城訳, 「生活世界——現象学者たちとの対話のために」, 『情況』, 1998年1・2月合併号, pp.101-126.
- \_\_\_\_\_ 1986b *Ökologische Kommunikation*, Westdeutscher Verlag. =1992, 土方昭訳, 『エコロジーの社会理論』, 新泉社.
- \_\_\_\_\_ 1987 "'Distinctions directrices": Über Codierung von Semantiken und Systemen', in *Soziologische Aufklärung* 4, Westdeutscher Verlag, S.13-31.
- \_\_\_\_\_ 1988 'Frauen, Männer und George Spencer Brown', *Zeitschrift für Soziologie*, 17(1), 47-71. →1997, *Protest*, Suhrkamp, S.107-155.
- \_\_\_\_\_ 1997 *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp.
- 清水太郎 1997 「ルーマンの社会システム理論」『岩波講座現代社会学別巻 現代社会学の理論と方法』岩波書店, pp.185-200.
- Spencer-Brown, George 1969 *Laws of Form*, George Allen and Unwin Ltd.=1987, 大澤真幸・宮台真司訳, 『形式の法則』, 朝日出版社.
- Wagner, Gerhard 1997 'The End of Luhmann's Social Systems Theory', *Philosophy of the Social Science*, 27(4), pp.387-409.
- Watzlawick, Paul/ Bavelas, Janet Beavin/ Jackson, Don D. 1967 *Pragmatics of Human Communication*, =1998, 山本和郎(監訳)・尾川丈一(訳), 『人間コミュニケーションの語用論』, 二瓶社.

(あかほり さぶろう)